

マルカタ王宮「列柱大ホール」天井画における  
描き直しについて

マルカタ王宮に関する研究Ⅲ

REPAINTING OF THE CEILING PAINTING OF THE GREAT  
COLUMNED HALL AT THE MALKATA PALACE

Studies on the Malkata Palace Ⅲ

西本真一\*

Shin-ichi NISHIMOTO

Concerning the painted ceiling fragments which must have belonged to the nave of the Great Columned Hall (lettered "Room H" by Tytys) of the main palace at Malkata, the quadruple spiral pattern is clearly visible beneath the depicted vultures.

Judging from the traces seen typically on the fragments A-K in Fig. 2 (seen in photographs 1-9), it is proved that at first the ceiling of the nave was painted with a quadruple spiral pattern (phase I, Fig. 3), and subsequently the repainting must have been done (phase II, Fig. 4). The connection between the change of the ceiling painting and the *sed*-festival might be pointed out.

**Keywords** : Malkata Palace, Ancient Egypt, vulture Nekhbet, Amenhotep III, quadruple spiral pattern, decorative painting

マルカタ王宮, 古代エジプト, ネクベト画像, アメンヘテプⅢ世, スパイラル文様, 装飾画

## 1. まえがき

これまでの論考<sup>1)</sup>においてはマルカタ王宮址内、「王の宮殿」の中心部に位置する「列柱大ホール」(以下、「ホール」と略、図一1参照)から出土した彩画片の分析をおこない、その結果に基づいて当「ホール」の天井にかつて描かれていた装飾画の複原図を作成した。考察の結果からは前稿<sup>2)</sup>の図一6で示したように、「ホール」天井の身廊部分<sup>3)</sup>には連続するネクベト画像と聖刻文字列が、また側廊部分<sup>4)</sup>には黄色の渦文の帯と青色のローゼットの帯とが交互に繰り返される文様(スクロール文様<sup>5)</sup>)が描かれていたと推定される。

しかし別稿においてすでに触れたように、当「ホール」の天井に描かれたネクベト画像、あるいは聖刻文字列の下層にはまったく別のモチーフが描かれていた形跡がうかがわれるのであって<sup>6)</sup>、この部屋の身廊部分の天井画が一度描き直されていることは明らかである。従って前稿の図一6は第2期の天井画の複原図に該当し、これとは別に身廊部分には第1期の天井画が存在したと考える必要があろう。

「ホール」天井画のこのような描き直しについて、タイトゥスの仮報告書<sup>7)</sup>のなかには記述を見ることができず<sup>8)</sup>、またメトロポリタン美術館の発掘調査報告<sup>9)</sup>にもうかがうことができない。一方、天井画の改変の際、新たに描かれた連続するネクベト画像はアメンヘテプⅢ世統治の時代より前の建築遺構には確認されていないモチーフ<sup>10)</sup>であって、この点からも描き直しがなされる前と後とで様相を異にしたはずの「ホール」天井画の最初のありさまを探ることには大きな意義があると思われる。

本稿ではそれ故「ホール」より出土した彩画片のうち、第1期のモチーフが比較的明瞭にうかがわれる断片に再び着目して、描き変えがおこなわれる以前の「ホール」の天井画について復原を試みることにしたい。

## 2. 出土彩画片の観察

「ホール」から出土した彩画片は全般には色彩を良好に保っているものの、部分的に軽微な損傷がうかがわれるものが多く、経年変化によると思われるひび割れやこ

\* 早稲田大学理工学部建築学科 講師

Lecturer of Waseda University



図一 マルカタ王宮、「王の宮殿」平面図  
 (網点部分は「列柱大ホール」を示し、またa~jはこの部屋における遺物の出土場所を示す。a=S(W), b=W(S), c=W(M), d=W(N), e=N(W), f=N(E), g=E(N), h=E(M), i=E(S), j=S(E))

れに伴う顔料層の剥落などがしばしば見受けられた。こうした彩画片のうち、身廊部分の天井画を構成していたと考えられるネクト画像片、聖刻文字列片の2種類においては、顔料層が部分的に欠損をきたしている箇所泥ブラスター<sup>11)</sup>の上に直接塗ったと思われる下層の色彩を観察することができる<sup>12)</sup>。

しかしながらほとんどの場合は彩画片自体の大きさが小さいため、あるいは画面の損傷がきわめて限られた部分にとどまるために描き直し前のモチーフを確定することができず、また損傷の程度が激しい場合には第1期の色彩の痕跡までもが剥落しているため、このモチーフを復原する際の資料として有効と考えられる彩画片の数量は非常に限られることとなった。

図-2にあげた彩画片は、ある程度の大きさを有し、なおかつ第1期のモチーフを伝えるもののうちでも特に典型とみなしうる断片である。図の左側には彩画片の彩画面に見られる損傷の状況と、そこに見られる第1期の装飾モチーフとを示した<sup>13)</sup>。

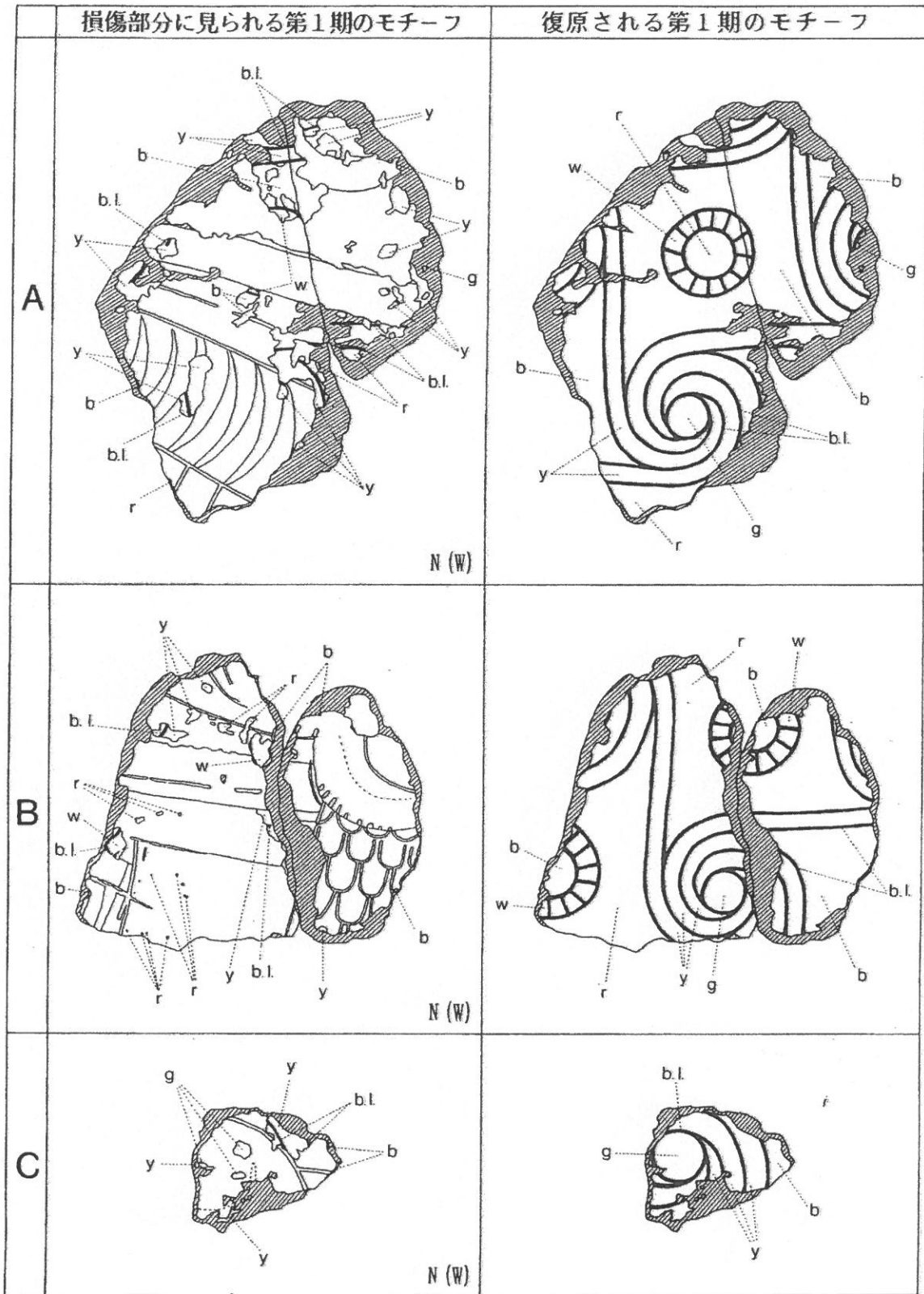
Aの断片にはネクトの向かって左側の翼、及びその上方に位置する別のネクトが左の足で掴んでいたはずの文字 *šnw* (𓏏, 「永遠」の象徴とされる) の一部が描かれている。ところどころで顔料層が破損しており、いくつかの剥落箇所では黄色地と黒色で引かれた曲線がうかがわれた(写真-1, 2)。またこの彩画片のほぼ中心には、青い地色や白くふちどりされた赤い円の痕跡も認められた。Bもまたネクト画像の一部であり、首、胴体とこれに続く左側の翼が示されている。彩画面における剥落部分には黄色地と黒の曲線、白い円の一部などがやはりうかがわれた。Cはネクトの胴体頂部をあらわし、その下層には黄色地に囲まれた緑色の地や黒い曲線が見られた(写真-7)。D-Fはともにサァ・ラー名を記した聖刻文字列の一部を示す。DとEでは左から右に

読むカルトゥーシュ内の最後の文字 W3st (𓏏, 「テーベ」の意味) の上部が、Fでは逆に右から左に読む同じ文字の下半分がうかがわれた。これら3つの下層にはいずれの場合においても黄色地と黒い曲線、青地あるいは赤地が観察される。Gはサァ・ラー名の後に続くべき修飾語 *dt* (𓏏, 「永遠に」の意味) を示しており、左から右に読むこの語の下方にはネクトの黒い翼の先端も見られる(写真-3, 4)。損傷を受けた部分には、同様に黄色地と黒い曲線、緑色の地、赤く塗られた地などが観察される。HとIもまた修飾語 *dt* の一部分であり、Hは右から左に読むべきものと考えられるが、I(写真-8参照)に関しては裏面の天井下地材の痕跡が残存していないためにどちらから読むべき文字なのか不明である。ただしここでも黄色地と黒い曲線、並びに赤地が見出された。Jはカルトゥーシュの一部とネクトの黒い翼の上端部を示す。その下層には白くふちどられた赤い円がかつて描かれていたことが明瞭である(写真-9)。なお、円の外周は青く塗られていた。Kは青と白のボーダーを示している(写真-5, 6)。白いふちどりをもった赤い円がここでも見られた。円の外周はやはり青色であった。

以上、11片の彩画片にうかがわれる第1期の色彩の痕跡について述べたが、マルカタ王宮に施されていたさまざまな装飾画のうち、上記のような配色がなされる文様が存在する。それは4方向に蔓を伸ばした黄色の渦文と、赤と青のローゼットとから構成される幾何学文様(以下「スパイラル文様」と仮称<sup>14)</sup>)であって、図-2の右側に示されるような装飾モチーフがそれぞれ復原される。当王宮ではこの文様が天井画の装飾モチーフとして頻りに用いられていることから、彩画片A~Kにもかかわらずスパイラル文様が描かれていたと推察されよう。

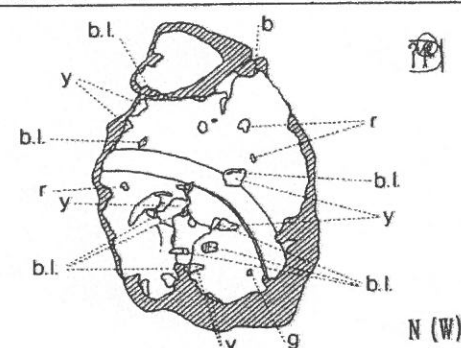
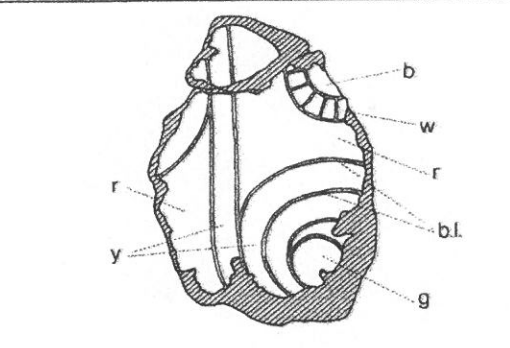
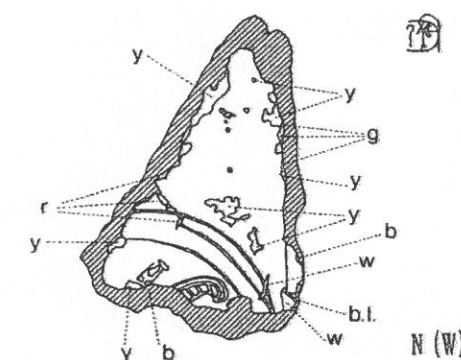
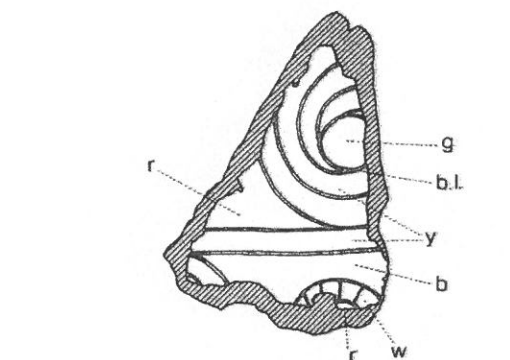
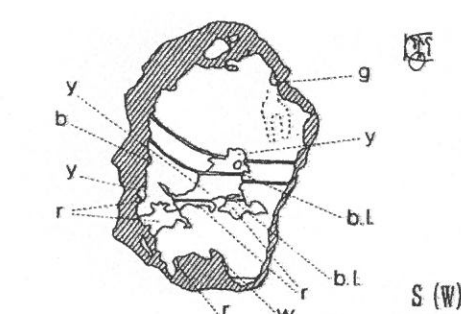
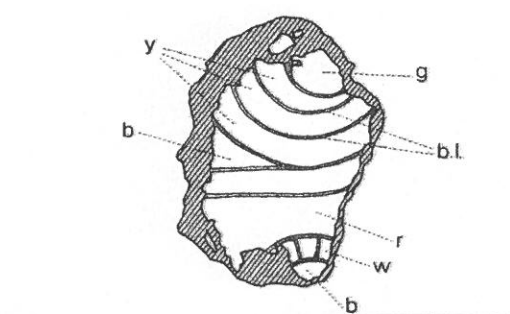
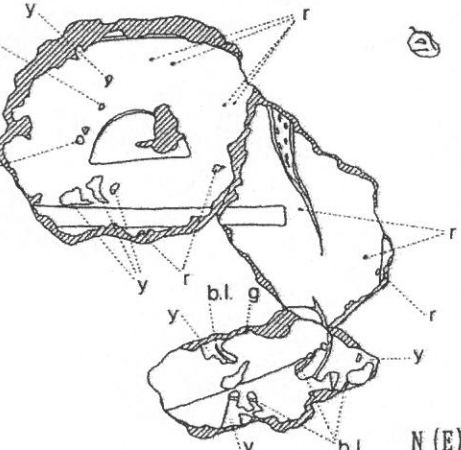
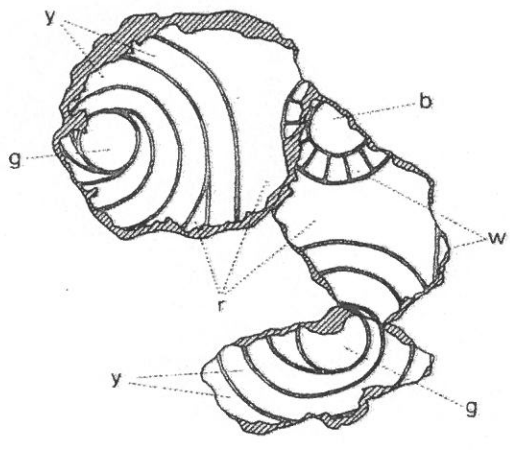
### 3. 第1期天井画の復原

図-2において示された彩画片では、S(W) 地点やN(W) 地点(図-1参照)から出土したものが多くを占めるが、これらの地点からはもともと他の場所と比較してネクト画像片や聖刻文字列片が多数出土している<sup>15)</sup>。従って、かつてスパイラル文様が描かれていたとみなされる彩画片が特定の場所から出土する傾向にあるとは考えるべきではなく<sup>16)</sup>、E(N) 地点やN(E) 地点といった場所でもやはり同様の彩画片が出土していることから、第1期のスパイラル文様は身廊部分の天井の全面に施されていたと推定するのが妥当であると思われる。図-2で見られるような左から右に読むサァ・ラー名、右から左に読むサァ・ラー名の断片のほか、下層にスパイラル文様がうかがわれる上下エジプト王名の断片も出土しており、またネクト画像についても胴体、左右の翼・脚などの各部位を示す同様の彩画片が発見された。さらには上記の彩画片以外のものに観察される下層



0 30cm

図-2 「列柱大ホール」出土、身廊部分天井画片（第1期における彩色の痕跡のみを記号で示す。r=赤、y=黄、g=緑、b=青、w=白、b.l.=黒線。斜線部分は彩画面の欠落箇所を、また左側の欄の右下に記した英文字は出土場所をあらわす。図-1参照）

	損傷部分に見られる第1期のモチーフ	復原される第1期のモチーフ
D		
E		
F		
G		

0 30 cm

図-2 (続き)

	損傷部分に見られる第1期のモチーフ	復原される第1期のモチーフ
H	<p>S (W)</p>	
I	<p>E (N)</p>	
J	<p>S (W)</p>	
K	<p>S (W)</p>	

図-2 (続き)



写真一 彩画片A (図一2, A参照)



写真二 同左, 詳細



写真三 彩画片G (図一2, G参照)



写真四 同左, 詳細



写真五 彩画片K (図一2, K参照)



写真六 同左, 詳細



写真七 彩画片C (図一2, C参照)



写真八 彩画片I (図一2, I参照)



写真九 彩画片J (図一2, J参照)

のわずかな色彩の痕跡も、これらが黄色の渦文や赤色、青色に塗られたローゼットの一部分をあらわすと仮想した場合、残存する色彩の痕跡の配置関係はスパイラル文様のそれと矛盾しないのであって、この点からも「ホール」天井の身廊部分の全面にはかつてスパイラル文様が第1期の袋飾画として描かれていたと判断してよいと考えられる。

側廊部分の天井に描かれていたと思われるスクロール文様片に関しては描き変えの痕跡がまったく認められないため、天井の描き直しは身廊部分においてのみおこなわれたと推察される。スパイラル文様の外周には色帯が巡らされていたことは、例えば彩画片Kなどから明瞭にうかがわれ、第2期と同じ色帯が描かれていたであろうと推測される。

このスパイラル文様を描く際には、側廊部分のスクロール文様と同じように<sup>17)</sup>基準線が前もって引かれたと推定される。彩画片より想定された復原図をもとに渦文の中心とローゼットの中心との間の間隔を計測したところ、約16～18.5cmという数値を得た。これは側廊部分のスクロール文様における基準線の間隔である約17cmという値に近い。おそらく第1期の天井画においては身廊部分にも、側廊部分になされたものと同様の間隔で基準線が引かれたと考えられる。

図-3は以上の考察から得られた結果をもとに復原をおこなった「ホール」の第1期の天井画全体図であり、比較のため前稿において復原した第2期の天井画を再び図-4として並べて示した<sup>18)</sup>。

#### 4. 第2期天井画の成立

「ホール」の天井の描き直しがいつなされたかは不明であり、床面における描き変えの場合では下層の色彩面に見られる摩耗の程度によって経年の度合いが推し量れる可能性もある<sup>19)</sup>が、天井画の場合にはこのような手掛かりを見出すことができない。マルカタ王宮がその主であるアメンヘテプⅢ世によって実際に使用され始めたのは、おそらく彼が王位を継いだ年から数えて第29年～30年のことであろうという類推が、日付を記された出土土器片に関する研究<sup>20)</sup>よりなされているが、王宮の建造はそれ以前より開始されていたはずである<sup>21)</sup>。ただし描き直しがおこなわれた時期の下限については、「ホール」の第2期の天井画においてアメンヘテプⅢ世のサア・ラー名が消されている事実から、次代の王であるアケナテンが王位を継承した時点より前であることが明白であり、天井が描き変えられたのはアメンヘテプⅢ世が在位していた期間に限られると考えることができる<sup>22)</sup>。

アメンヘテプⅢ世のセド祭(王位更新祭<sup>23)</sup>)については、彼の治世年第29～30年、第33～34年、第37～38

年の合計3回おこなわれたことが知られている<sup>24)</sup>。これらの儀式がすべてマルカタ王宮内でおこなわれたらしいことまでは推測されているものの、不明な点が多い<sup>25)</sup>ために天井画の描き直しとこのセド祭とを結びつけることには慎重にならざるを得ないが、しかしその可能性を指摘しておくことは必要であろう。

なお天井画の描き直しの際には、第1期の装飾画の上に泥プasterを薄く塗り、その上に新たに第2期の天井画を描いたらしいことが彩画片より知られる。当王宮において壁画の描き変えがなされる場合には同様の処置がとられており<sup>26)</sup>、また職人が住んだアマルナの住居の場合でも壁画の描き直しにおいて同じ処置がなされていることが報告されている<sup>27)</sup>。ネクベト画像を描くための補助線と思われる白線もいくつかの彩画片で見られたが、泥プasterの上に直接、墨糸を用いて印されているように見受けられるため、泥プasterを天井の身廊部分の全体に塗ることによって、描かれていた第1期の天井画を一度消し、その上に改めて補助線を印してネクベト画像を描いたと考えられよう<sup>28)</sup>。

#### 5. 結語

「ホール」の天井全体の装飾画を復原した先稿に続いて、本稿では天井画片に見られた描き変えの痕跡に注目して考察をおこない、この部屋の身廊部分の天井画における第1期の装飾画と第2期の装飾画をそれぞれ明らかにすることができた。今回「ホール」の天井画に関し実際の出土画片に基づいた第1期と第2期の復原図が提示されたことで、当王宮建築に関する研究を進めるための新たな一資料を加えることができたと思われる。

第2期の天井画が描かれた時期を特定することはできなかったが、すでに前稿<sup>29)</sup>で触れたように、連続したネクベト画像は古代エジプト美術史上においてこの時初めて描かれたと思われ、当画像の意味と王権との関わり、またこの表現が時代によって変遷する過程についての詳しい研究が待たれる。

なお本研究は、文部省科学研究費海外学術研究(昭和60～62年度交付、研究代表者：早稲田大学理工学部教授渡辺保忠、課題：『エジプト・マルカタ南・魚の丘建築の復原調査研究、マルカタ王宮址との建築学的・美術考古学的比較研究』)の交付を受けた調査の成果に基づき、おこなわれた点を付記する。

また柏木裕之君(早稲田大学大学院博士課程)からは「ホール」出土彩画片全点の写真撮影並びにそれらのトレース作業、資料の分類作業などにおいて多大な助力を得た。図-3、4の作成に当たっては着彩作業を同大学院修士課程の河崎昌之君、ほか5名が進めてくれた。記して謝意を表したい。

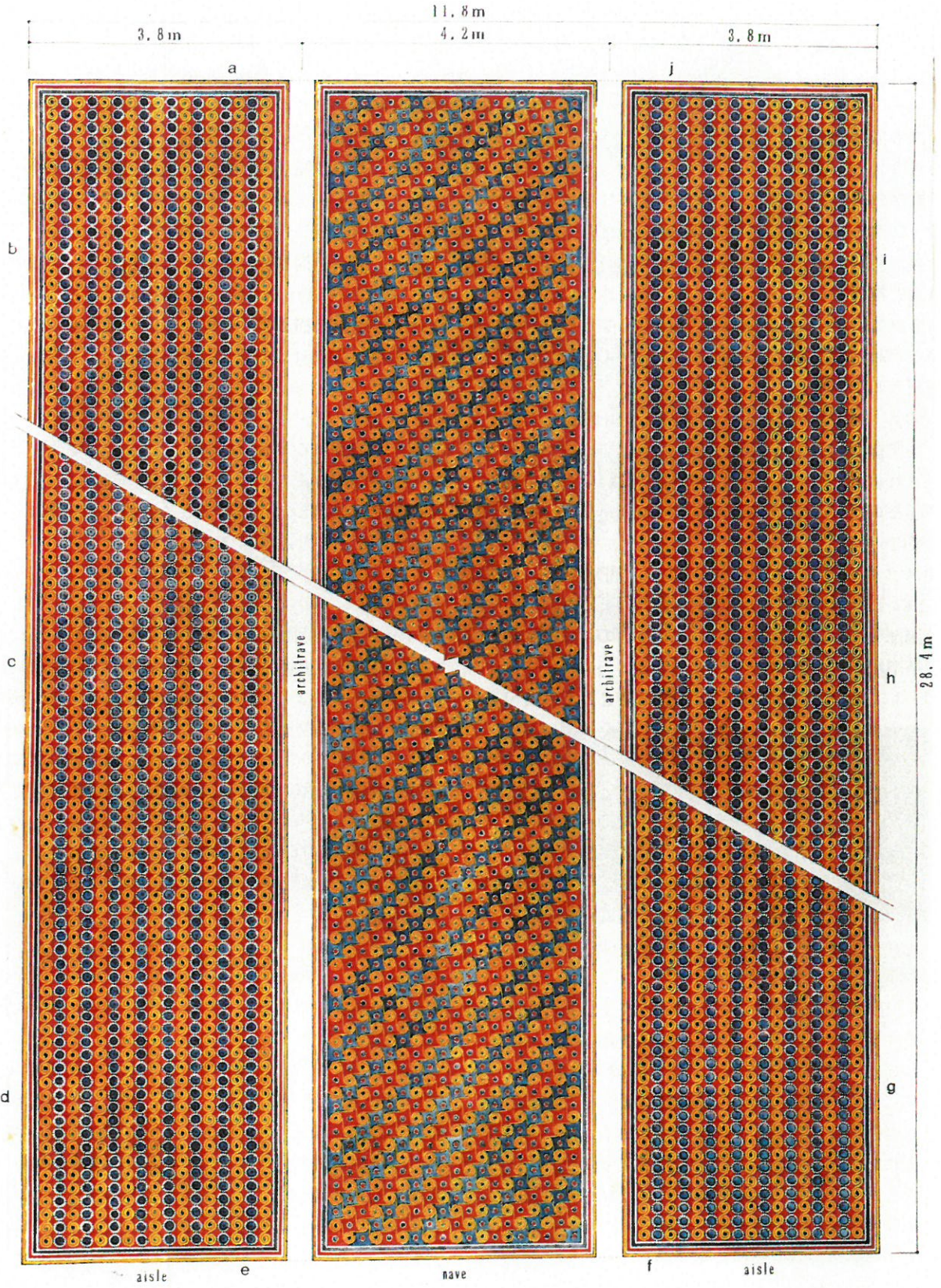


図-3 「列柱大ホール」第1期天井画復原図



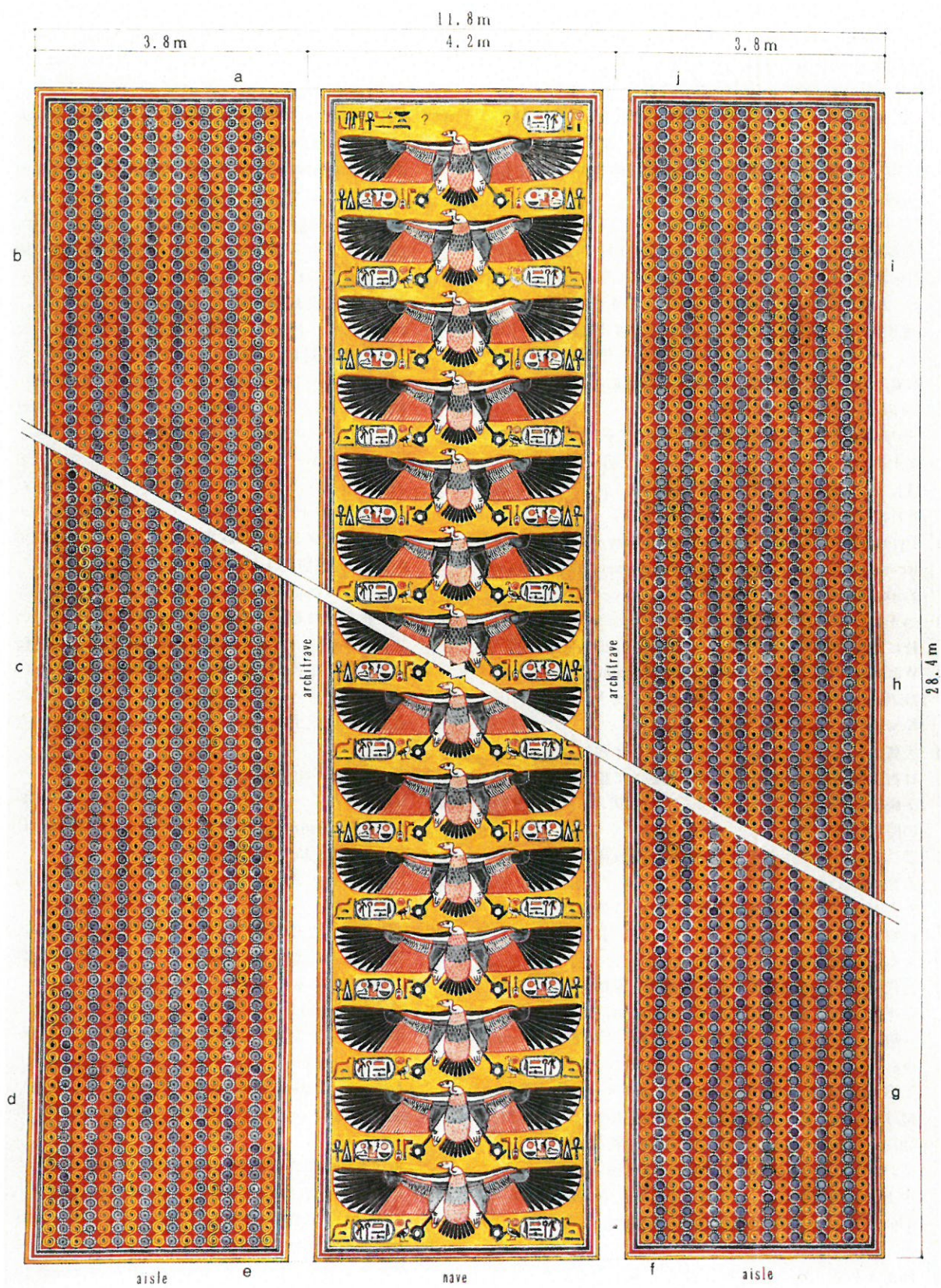


図-4 「列柱大ホール」第2期天井画復原図

註・参考文献

- 1) 拙稿「マルカタ王宮「列柱大ホール」天井画におけるネクト画像の復原研究、マルカタ王宮に関する研究Ⅰ」、日本建築学会論文報告集、第416号、pp.111~121、1990年10月；同「マルカタ王宮「列柱大ホール」天井画における「スクロール文様」の復原研究、マルカタ王宮に関する研究Ⅱ」、日本建築学会論文報告集、第425号、pp.101~112、1991年7月（以下それぞれ「復原研究Ⅰ」、「復原研究Ⅱ」と略）。
- 2) Cf. 「復原研究Ⅱ」、p.109。
- 3) 「復原研究Ⅰ」、「復原研究Ⅱ」では「中央柱間部分」と表記をおこなったが、理解しづらい点があると思われるため、本稿においては「身廊部分」と名称を変更した。
- 4) 「復原研究Ⅰ」、「復原研究Ⅱ」においては「脇間部分」と呼んでいるが、誤解を招く恐れがあると思われるため、本稿においては「御廊部分」と名称を改めた。
- 5) 「復原研究Ⅱ」、pp.102~104。
- 6) 「復原研究Ⅰ」、p.114；拙稿「マルカタ王宮出土彩画ネクト画像の復原について、マルカタ王宮に関する研究Ⅱ」、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.905、1986年8月、特に図一F。
- 7) Tytus, Robb de Peyster: A Preliminary Report on the Re-excavation of the Palace of Amenhotep III (New York, 1903)。
- 8) 当王宮の床の描き変えについては *ibid.*, p.10 参照。同様に壁画の描き変えに関しては *ibid.*, p.20 を参照。
- 9) Winlock, H. E.: The Work of the Egyptian Expedition, *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art*, Vol. 7, No. 10, New York, pp.184~190, 1912。
- 10) 禿鷹の姿で現されるネクト女神像が単独で描かれる例は古王国時代から存在するが、連続して描かれたネクト女神像が登場するのは第18王朝、特にアメンヘテプⅢ世の時代以降である。
- 11) ここでは日乾煉瓦を積んでいく際に煉瓦同士を接合させるため煉瓦の間に充填する泥を「泥モルタル」、また、立ち上がった壁画に装飾画を施すため、この表面に滑らかに塗られる仕上げの泥を「泥プラスター」と呼んで区別することとする。
- 12) 古代エジプトの絵画においては通常、装飾が施される面に下地としてまず石膏 (gypsum plaster) が塗られると一般には説明されている (Robins, G.: *Egyptian Painting and Relief*, Aylesbury, p.20, 1986; James, T. G. H.: *Egyptian Painting*, London, p.13, 1985; Mekhitarian, A.: *Egyptian Painting*, New York, p.24, 1978)。しかしこれは対象を宗教建築に限った場合であって、住宅などの非宗教建築の場合、装飾画は泥プラスターの上に直接描かれた。Peet, T. H. and Wooley, C. L.: *The City of Akhenaten, Part I*, Oxford, p.59, 1923 など。
- 13) 図がきわめて見にくくなるために、第2期のモチーフの色名については省略した。第2期に描かれたネクト画像片や聖刻文字列の各部の色彩に関しては、拙稿、「エジプト・マルカタ王宮「Room H」天井画における聖刻文字列の復原研究」、早稲田大学理工学研究所報告129、pp.58~79、1990年9月、特に Figs.4~6 を参照。
- 14) 「復原研究Ⅱ」、pp.102~104 参照。
- 15) 「復原研究Ⅰ」、表一参照。
- 16) 「ホール」における彩画片の出土場所と描かれているモチーフの関連については「復原研究Ⅱ」、pp.105~107 を参照。
- 17) Cf. 「復原研究Ⅱ」、pp.107~108。
- 18) 「復原研究Ⅱ」の図一6を一部改め、さらに着彩を施したのが本稿の図一4である。最上位に記された聖刻文字列のうち、向かって右側にある左から右に読む文字列が新たに付加されている。「復原研究Ⅰ」の図一5、C6にあげた“mi” (𓄎) をあらかず断片には、水平に引かれた白線らしきものが見られることがその後の作業で明らかにされた。これは図一5、Aに示した断片と共通する特徴である（「復原研究Ⅰ」、pp.116~117を参照。なおp.116の右、下から5行目、「色帯に対し、直交した…」は「色帯に対し、並行した…」の、またp.117、左、1行目の「直交した方向の…」は「並行した方向の…」の誤りである）。“mi”の左側には内部の文字が消されたカルトウーシュの一部がうかがわれるため、このカルトウーシュにはサァ・ラー名が記されていたはずであると考えられる（次代の王アケナテンはアテン神を信仰したために、アメンヘテプⅢ世のサァ・ラー名「アメンヘテプ」の中の、アメン神を意味する文字「アメン」を抹消している。「復原研究Ⅰ」、註43）参照。従って“mi”の断片は、まったく不明であった最上位の右側の文字列の一部と推定される。カルトウーシュの前に存在していたはずの文字については、同時代の右造建築遺構と比較して類推をおこなえば、“s3 R<sup>c</sup>”（「復原研究Ⅰ」、p.116参照）だけでなくさらに他の修飾語が加えられていたと考えられるが、確定することはできないので復原をおこなわなかった。
- 19) Tytus, *op. cit.*, p.10。
- 20) Hayes, W. C.: Inscriptions from the Palace of Amenhotep III, *Journal of Near Eastern Studies*, Vol. 10, Chicago, pp.35~40, 1951。
- 21) *Lexikon der Ägyptologie*, Bd. III, Wiesbaden, 1975, col. 1174。
- 22) ただし、ふたりの王に関する各々の正確な在位期間は研究者によって説が分かれており、ふたりが一定期間、共同統治をおこなっていたとする説もある。
- 23) 元来は即位30年目におこなわれる儀式で、王の活力を回復することを象徴するものであった。
- 24) Hayes, *op. cit.*, pp.35~40; Van Siclen III, C. C.: The Accession Date of Amenhotep III and the Jubilee, *Journal of Near Eastern Studies*, Vol. 32, Chicago, pp.290~300, 1973。
- 25) 現在までの研究の結果、第1回目のセド祭に関しては、マルカタ王宮に付設された人工湖（「ビルケット・ハブ」と呼ばれる。「復原研究Ⅰ」、図一1参照）近くに新しく建てられた建物内でおこなわれ、後にこの建物は取り壊されたと推測されている (Kemp, B. J.: *Ancient Egypt: Anatomy of a civilization*, New York, pp.213~216, 1989, また Kemp, B. J. and O'Connor, D.: *An Ancient Nile Harbour: University museum excavations at the "Birket Habu"*, *The International Journal of Nautical Archaeology and Underwater Exploration*, London, pp.132~133, 1974)。第2回目のセド祭は、おそらく「王の宮殿」

の北東に建つアメン神殿で執りおこなわれたと考えられており (Hayes, op. cit.), この神殿そのものが第2回目のセド祭のための施設であったろうと言われているが、詳細は不明である。第3回目のセド祭についてはよくわかっていない。

- 26) 「ホール」南東のハーレムの一室から出土した壁画の断片で、彩色された面の上に3-4 mmほどの厚さで泥を塗り、この上に再び彩色をおこなっている例が見られる。

27) Peet and Wooley, op. cit., p. 59.

28) 連続して描かれたネクベト画像のうち、補助線を残している例としては, Romer, J.: *Ancient Lives; The Story of the Pharaohs' Tombmakers*, London, 1984, Colour Plate 17 (セティⅡ世王墓第1通廊天井)などを参照。

29) 「復原研究Ⅰ」, p. 119 参照。

(1991年9月3日原稿受理, 1992年3月3日採用決定)